

# 保健体育科

## 創作ダンスの指導(2)

### —授業計画の点検—

北田明子

#### はじめに

本校では、高校女子の体育に創作ダンスを位置づけて毎年とり組んできているが、授業方法に多少の改善を試みてはいるものの、依然として試行錯誤を続けている。最近の生徒達は数年前に比べて、日常的にTVでダンスに接する機会も多く、また、ジャズダンスやエアロビクスダンス等の流行にもあらわれるよう、一般的にダンスへの興味関心が高まっている状況であるにもかかわらず、なお、学校の授業としての創作ダンスには多くの心理的抵抗があるようである。この理由の一つは、生徒達の年令的なものからくる羞恥心・自我意識によるし、また経験の少なさでもあると思われるが、また一つは、創作ダンスがもつ特性からとも言えよう。すなわち、ダンスの原点を「楽しく踊る」こととする立場と、「思想・意識の身体表現」とする立場のうち、創作ダンスは後者の立場を主にしていこうとするものであるから、そこで一人一人に当然要求されるのは、表現されるべき内容としての考え方や見方をもつ主体であることであり、同時にその内容を客觀化して、身体を通してまさに表現する主体であることの、二重の意味での表現主体であることである。こういったことは、シンガーソングライターなど音楽の分野でも行なわれてはいるが、それだけに、全部の生徒に経験させるには多くの困難点がある。ここに、ダンス嫌いの生徒達が言う「ダンスはめんどうだ」「何をどうやっていいかわからない」等の理由があろう。また、グループ創作で人間関係がネックになる理由でもあろう。

本校では、中3においてフォークダンスの授業を行ない「踊る」ダンスを経験させると共に、高校1・2年生で「考える」ダンス、「あらわす」ダンスとしての創作ダンスを実施してきている。特に創作ダンスの授業では「つくる」ための指導と「踊る」ための指導が行なわれる必要があるが、しかし、限られた時間内で両面ともに不十分な指導に終ってしまう事が多く、よりよい指導法の確立をめざすことが差迫った大きな課題である。本稿では、57年度のグループ作品をとり上げ、生徒の感想や活動記録を手がかりに、ダンス授業の計画や方法を点検し、授業方法の改善を目指してゆきたい。

#### I 授業計画

##### (1) 創作ダンス授業の全体計画

対象：昭和56年度高校入学者 女子69名

単元：① 昭和56年4～6月（7時間）

身体表現のための基礎運動、即興

② 同年 9～12月（9時間）

2～3人の小グループによる創作  
VTR撮影

③ 昭和57年4～6月（8時間）

既成作品による集団の動き、空間形成の  
練習。VTR撮影

④ 同年 9～10月（10時間）

5～7人のグループによる創作。VTR  
撮影

##### (2) 第4単元の授業計画

対象：高2女子 69名（全3クラス69名が、名列順  
の前半、後半クラスの2クラスに分れる）

時期：昭和57年9～10月（10時間）

方法：ア 各クラス6グループ編成。1Grは5～7  
名。

前半クラスは、ABCのHRごとに任意  
後半クラスは、HRにこだわらず任意  
の6グループとし、全部で12グループで  
ある。

イ 作品の条件 2～3分間。自由な伴奏つき。  
衣装・照明は考えない。  
発表は体育館フロアー8×  
10mの平面

ウ 每時間の活動記録提出を各グループに義  
務づける。

エ 授業日程（表1）

#### II 授業計画の点検

##### (1) 授業時間数はどうだったか

計画の10時間に対して「短かすぎる」と答えた者が各グループとも圧倒的に多く、「創作活動が予定通りできなかった」という回答が多いのと一致している。予定通りできなかった主な理由は、動きが思い浮ばない、テーマの表現がむつかしい、授業中にムダ話しが

創作ダンスの指導 (2)

表1 57年度 創作ダンス活動予定  
高2前半

時	月 日	活 動 内 容	提 出	備 考
1	9. 16(水)	「グループ作品をつくるために」 創作の手順、日程等 参考作品の鑑賞 グループづくり 感動の体験を話し合い主題をきめる 内容を具体的にする	毎時の創作記録	○56年度作品を VTRでみる (1年・2年) ○計画書用紙 配布
2	9. 20(月)	主題と動きを結びつける(スケッチ風に)	計 画 書	
3	9. 30(木)	〃		
4	10. 4(月)	全体として流れ、空間形成をする。		曲を選ぶ
5	10. 7(木)	曲を手がかりにして、形式をととのえる		中間発表
6	10. 14(木)	〃		
7	10. 18(月)	全体を通して練習する		発表順抽せん
8	10. 25(月)	リハーサル		評価票による 相互評価
9	10. 28(木)	発表・鑑賞・評価		VTR撮影
10	11. 1(月)	高2合同発表会(予定)	○プログラム原稿 ○作品図解 ○創作の記録 (作品図解) ○感想文又は アンケート	

表(2) 授業時間外の活動時間数(メンバー1人当たり平均時間数)

時間	※	○※ A	○ B	○ C	△ D	△ E	○ F	△ G	○ H	○ I	△ J	△ K	△ L
1～2時間		○		○									
3～4							○						
5～6				○		○				○	○	○	
7～8		○											
9～						○			○	○			

※グループのA～Lは作品完成度の高い順

※○前半クラス △後半クラス

するなど雰囲気ができていなかった、一部の人からしか意見がでない、はじめの部分に力を入れすぎた、意見がまとまらない、等であった。動きや表現のアイデアが浮ばなく、話し合いが難行したグループがほとんどであった様子がうかがわれる。

そこで生徒達は、時間の穴埋めを始業前や放課後の利用で行なったが、そのおよその時間数は次のようにある。(表2)

授業計画10時間に対して、課外の練習や相談、あるいは選曲のために、各グループとも5～6時間平均、多いグループでは10時間以上も費している。表(2)の数

字で見る限り、明らかに授業時間不足であると言える。しかし、彼女達が授業の10時間を十分活用したかと言えばそうではなく、むしろダラダラと過ぎるにまかせたところもある。よい作品を生んだグループが必ずしも多くの課外時間を費しているのではない。とは言え、できれば創作に使える時間をあと数時間確保できたら、より望ましいようである。

(2) グループ分けはどうだったか。

創作ダンスが個性を出し合い、ぶつけ合って行なわれるものとの立場に立てば、グループの人間関係は、非常に大きな要素である。作品の質・内容からは、異

表(3) グループのプロフィール

グループ(人)	作品評価	特徴	一年時の作品評価の平均(全員がAの場合を100として)
A (6)	A	メンバーはやゝおとなしい者が集まっているが、個性が強く、表現力もあるリーダーが中心でよくまとまっている。	A 1 B 2 33 C 3
B (6)	A	全員が活発でダンスに対する意欲も高く、表現力の優れている者もいる。日常的にも仲の良いメンバーが中心になっている。	A 2 B 4 65 C 0
C (6)	A	一人のクラシックバレを続けている生徒が創作のリーダーになっているが、グループのリーダーというわけではない。全体的にはダンスに興味はうすく2~3の小グループが寄り集まっているが、リーダーの表現力、構成力に引っ張られてまとまっている。	A 4 B 1 75 C 1
D (6)	A	やゝ協調性に欠ける者が集まっているが、強い個性のリーダーがいてまとめている。リーダーのダンス表現力は普通程度である。	A 2 B 4 65 C 0
E (5)	B	全員が、平時はあまり目立たないおとなしい性格だが、まじめな努力家といったタイプである。ダンスに対する興味は平均して高い。	A 3 B 2 80 C 0
F (6)	B	2~3人がダンスに興味をもっており、あの者も協力的である。グループ全体は明るい感じである。	A 1 B 3 41 C 2
G (7)	B	2~3人の小グループが寄り集まっている。特にリーダーがないし、ダンス意欲は低い方。	A 0 B 3 21 C 4
H (6)	B	リーダーの生徒によくメンバーは従っているが、リーダーのダンス表現の力はやゝ低いため、行きずまりが起きやすい。	A 1 B 4 50 C 1
I (5)	B	ダンス経験があり、表現力も高い生徒がいてリーダーとなっているが、日常の結びつきが弱いので力が發揮できない。	A 0 B 2 20 C 3
J (5)	C	日常の仲良しがそのままグループとなっている。流行に敏感でやゝ派手なグループだが、個性を出し合うことができず、お互いを制するところがあり、すぐおしゃべりになってしまう。	A 1 B 3 50 C 1
K (6)	C	リーダーの個性が強くやゝ寛容さに欠けるところがあって、1~2名がそれについてゆけない。意欲の高い者の方が、消極的で協調性のない少数派とまじりあうことことができなかった。	A 1 B 3 41 C 2
L (5)	C	日常的にやや孤立した者が寄り集まつた状態。性格的に開放感をもつ者が少なくグループの雰囲気も明るさに欠けている。	A 0 B 2 20 C 3

## 創作ダンスの指導 (2)

質な個性がまじり合った方がおもしろいが、一方、気が合うかどうかという点では、ある程度は日常生活での仲良しがグループになった方が、いろいろと円滑である。今年度は、前半クラスをH R単位での自由集団、後半クラスは完全自由集団として、それぞれ5~7名で6グループになるよう編成した。全体的には、前半クラスは後半クラスより意欲的である者が多かったようだ。表(3)に、12グループのプロフィールと一年生時の評価の分布、指數を示した。一人一人の創作の力が、グループによって生かされたり打消されたりすることが端的にあらわれている。

(表3)

それぞれのグループのメンバーが、自分たちのグループの人間関係についてどう見ているか、表(4)に示した。(表4)

K, Lを除いた10グループはグループ内の人間関係の評価がよく、しかも、かなりよく意見がまとまっている。一方、K, Lの2グループでは、悪いと評価している生徒がほとんどである。このうちKグループでは、親しい友達と一緒にいた者が大部分で、日常的な友人関係から積極的にグループ結成を行なったようであるが、Lグループは、どちらかというと仲間はずれか、又は、友人の少い者の寄り合い世帯グループという印象である。このようなグループが、作品の完成度からも未熟なままで終ったことは問題である。Aグループの場合には、よいリーダーによって完成作品へと導かれている。人間関係が悪いとよい作品が生れず、よい作品が生れないから人間関係の改善もない。しかも、よいリーダーに恵まれず、作品がよくなる契機を失ったままである。このような悪循環にはまり込んだ

のがLグループだったようだ。このあたりに、自由なグループ編成を行なったマイナス面があらわれていると考えなければならない。Kグループは、はじめは人間関係もよかつた筈だが、創作過程で仲間の見方にマイナスの変化があり、メンバーには創作能力の優れている者や表現に優れている者も多くいながら、作品としての完成度が低いままに終ってしまったグループで、まさに人間関係の悪化そのものが作品を完成させなかつたと言える。そして、人間関係の悪化の原因は、無気力、低意欲者の存在であり、彼女達と意欲のある者たちとの間に大きなギャップができてしまったことであろう。一部の者の非協力的な態度による仲間割れはEグループにも見られたが、このグループは、他の成員の一層の団結によって、完成度の高い作品に仕上げることができ、満足感を味うことができた。

(3) VTRの活用について、効果があったか。

(表5)

数年前から創作ダンスの導入には、前年度作品の8%又はVTRを使ってきた。VTRは、自分達の作品と、上級生のグループ作品の両方を使用し、特にグループ作品については、テーマの内容を解説したり、作品の構成について分析したりしながら、生徒達に創作の要点をおさえていく事を目的として見せていった。その結果生徒達がどの程度、興味・関心をもったかが、表5にあらわれている。表によると、「おもしろそう」ととした生徒が約45%おり、「やりたくない」と思った23%を大きく上まわっている。しかし、気持ではひかれるものの、実際に自分達ができるのかという不安があり、作品の出来上りからみても、前年度の作品が具体的に参考になった点は少ないようである。VTRによる作品の再生というだけでなく、教材としては、

表(4) グループの人間関係

グループ		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	(人)	割合%
全体のつながり	とてもよい	4	6	4	2		3	5	3	1	4			77	
	かなりよい			1	3	5	3	2	2	2	1	1	1		
	わからない	2		1	1				1	2		1	1		
	やや悪い											2	3	10	
	とても悪い												2		
親友嫌いな人	いた	3	6	6	5	5	3	7	6	1	5	5	3	80	
	いなかった	3			1		3			4		1	2	20	
	いた					1			1	1		1	2	10	
	いなかった	6	6	6	6	4	6	7	5	4	5	5	3	91	

表(5) VTRによる導入の効果(複数回答)

(人)

グループ		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	合計	割合%
導入でVTR感想を想	おもしろそう・やる気がでた	4	4	6	1	2	1	3	2	4		2	1	30	43
	やりたくないなった					4	1	4	1	1	3	3	1	19	36
	不安になつた			1	1				1		1	1	1	6	
	特にどうとも言えない	2	2			1	2	2	3	3		2	1	21	30
作品の内容	とても参考になつた						2						1	3	58
	少し参考になつた	3	3	4	3	5	3	5	2	3	2	2	2	37	
	あまり参考にならなかつた	3	2		2			2	3	1	2	2		17	26
	全然参考にならなかつた									1				1	

創作過程に沿って部分を見ることができたり、イメージと動きの接点をとり出して見ることができるなど、創作方法のガイダンス的要素をもたせることが必要であろう。

#### (4) 創作活動には積極的にとり組んだか

授業時間中の活動状況については、具体的にどのくらい活動したかとらえにくいが、ダンスに示した関心の度合である程度知ることができよう。表(6)によると

60%ぐらいの生徒は楽しく活動でき、30%ぐらいは嫌だけど仕方なく活動していたことがわかる。樂しかったというのを積極的だった者と考えると、嫌だった消極組の存在も無視できないほど大きい。嫌いな理由は、まず、動きのアイディアが浮ばない、動きがマンネリになる、話し合ってばかりでめんどくさい、などである。

表(6) 創作活動は充実していたか

(人)

グループ		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	合計	割合%
とても楽しかった		1	3	2		1	1	2	1					11	61
まあまあ楽しかった		5	3	2	1	3	3	2	4	3	4		1	31	
どちらとも言えない					1	1			1	1	1	1	1	7	10
少しいやだつた ※				1	4		2	3		1		2	3	16	29
とてもいやだつた				1								3		4	

※めんどくさい

彼女達が作品を作つてみて、完成のための大きな要素となるものは何だと感じたかは表(7)に示した通りである。第1は、個人一人一人がもつ独創性・創造性であると自分の力について反省しつつ、一方では、それだけでない他要因、練習時間や人間関係等が作品創作に大きく作用していると感じている。この中には指導者の側で解決しうる問題もある。彼女らには創造性が少ないのではなく、ダンス創作についてはまだ未開

発であるという方が正しい。たとえば、語彙が乏しいとか、よい文章に接していないと、よい文章が書けないと同じであろう。生徒達が直接ダンスに接する機会で言えば、近年ふえたとは言うものの、他のスポーツに比べて数段少ないので現実である。

創作ダンスの指導 (2)

表(7) ダンス創作に影響した要因

(複数回答可) (人)

要 因 \ グループ													割 合 %		
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	合計	57年度	51年度
テーマの良悪			2			1			1	1	1		6	9	17
人間関係		1		1	2			3	2	1	2	1	13	19	14
表現技術	1	3	1			3	1	1	1		1	12	17	11	
活動時間		3		1		4	3			2	2		15	22	16
リーダーの指導力													0	0	3
個人の創造性	6	4	1	2	2	1	2	2	2	1	1	2	26	38	36
経験												1	1	1	

人間関係をよくするためにグループ作りを工夫したり、授業時間の確保という点はある程度改善することができる。しかし、時間数が確保できても、その中で生徒達が無駄なく活動できるかどうかは別問題である。

切羽詰って課外にバタバタとつくってしまうのではなく、着実に授業時間を生かすようにするという事は当分望めそうもない。今年度の「10時間」という枠は、期間にして約2ヶ月に相当し、妥当な時間数であろう。表現技術については、一年生一・二学期の期間に、さらに効果的にダンス技術を修得しうるプログラムを考える必要があろう。

(5) まとめの仕方はどうだったか ( VTR の活用 )

創作ダンスのまとめとして、①クラス毎の発表会をもち、相互評価を行なう。②前・後半クラス合同発表会を開き、全作品をVTRに記録するという方法をとった。そして、①と②には多少の時間的ゆとりがあるので、評価で得た助言を参考に、練習や手直しを行ない、合同発表会の時は、全グループが1回目よりよくこなして、それぞれの作品を個性的な作品に仕上げていた。この発表場面で、生徒達がダンスをどう受け止めているかは表(8)のようである。

表(8)一 ア 発表会の感想

(人)

グループ													%	
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L		
とても楽しかった	5	4	4	5	4	3	4	3	2	1	1	1	37	83
まあまあ楽しかった	1	1	2	1	1	3	2	3	2	2	1	1	20	
どちらでもない														
少しいやだった ※		1						1		1	2	3	8	17
とてもいやだった											1	3	4	

※嫌いな理由 ○まだ覚えていない ○恥ずかしい ○評価が悪い ○できていない

(8)アでわかるのは、発表会はお互いに作品の出来ばえにかかわらず楽しんだという事である。活動過程を追ってみると、とりかからり前の関心は45%が興味をもち、創作活動中は60%が楽しくやり、発表会は80%が楽しかったと感じるというようになっている。発表会がおもしろいのは、自分達の作品に自信があるからでないことは、表(8)イ、(8)ウでわかる。シラケてしまっ

たり、どうせダメな作品だからと、手を抜いたりするグループがなかったのがよかったです。しかし、緊張して、一生懸命やろうとしているが、踊ることを楽しむ、発表を楽しむ段階にはほど遠いものである。問題は、とてもいやだった、もう二度とダンスなどやりたくないという印象で終ってしまった生徒達がいたという点

で、授業の根本的見直しも必要である。つくる苦痛のみ味い、踊って楽しむ部分が欠落したのでは、真にダンスを教材としてとり上げる意味がないと思う。他の

グループの作品を見るのは楽しかったという点では、全員が一致するようだった。

表(8)一イ 自分の発表の時の気持

(人)

グループ	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
緊張	2	1	1	2	2	4	3	2	1	5	2	2
無我夢中	1	1	2	3	2	1	1	3	3		8	1
余裕		1				1						
楽しい	3	3	2	1	1		2		1			
とてもいやだ										1	2	
普通			1				1	1				

表(8)一ウ VTR撮影

グループ	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
とても緊張した、あがった 練習通りできなかった、まちがえた	4	6	6	4	2	6	5	4	3	5	5	4
あがらない、練習通り	2				1	3		2	2	1		1
わからない、覚えていない					1				1			1

#### (6) 活動記録・作品図解の位置づけ

今年度の授業では、各グループに毎時の活動記録提出を義務づけた。これは、その時間のメモ代りのものであり、それに記入することで動きを確かな形あるものとしていくとか、予定に沿って進めていくという目的であった。これらの意図は生徒達も理解していたがはからず時間が続くと、次第に形式的な提出になってしまったグループができたりした。

作品図解は最後に提出を義務づけたものであるが、その目的は、即興的動きから形式のととのった作品へと高めることであった。さらに、図解の技術が許せば、「舞踊における楽譜」として、一過性の作品を再現可能な作品に仕上げるという意図ももっていた。生徒達に主旨を説明して、各グループとも工夫した図解を提出したが、やはりダンスの要素はいろいろあって、リズム・空間・集団の移動等が、また動きの記述そのものが文や図になりにくいため、音譜代りというところまでは出来なかつた。動きの記録方法を検討し、さらに可能性を追求してみたいと思う。(作品図解例)

#### (7) 目標設定はどうだったか

先回の報告(昭和52年度)で設定した目標は、①より作品をつくる②一人一人が創作活動を実践する③満足感、表現の楽しさを知る、の三点であった。今年度についても同じ観点でみると、①～③まで一応高い

水準で達成できているようである。(表9,10)しかし一方、表10によれば、表現することは楽しいとする者は30%強程度なのに対し、「むつかしい」と思う者が80%をこえている。「ダンスがむつかしい」と言うう感覚的に「おもしろい」とか「いやだ」というのと違ひ、努力や挑戦することで何とか解決できる状態であろう。考えることを要求され、考えてはいるが、なかなか考えが浮んでこないから「むつかしい」と思う。いわば好き嫌いのどちらにもなりうるニュートラルの状態であるので、結局は作品の出来上りによって、ダンスを「好き」になったり「嫌い」になったりするという面があることがわかる。むつかしさを感じるという事は、それだけ真剣にとり組んだと評価される面があるが、一方、やはり経験や年令や、全生徒が対象であるということから考えると、作品完成度の水準が高すぎたのではないかという面もある。作品のレベルが高くなればなるほどお互いの評価が難しくなりがちである。今年度は、教師の指導でそうなったというよりお互いの作品に刺激されて、共通の水準がやや高く設定されてしまったということのようである。もう少し手軽に気楽にダンスができるということを経験させた上で作品づくりにとり組ませないと、いたずらに、むつかしい面倒なものとなってしまう恐れがあろう。

表(9) 一人一人の作品へのかかわり（個性の生かされ方）

グループ	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	割合%
十分生かされた	1	2	1	2	4	1		1	2	3			75
少しだが生かされた	2	4	3	4	1	3	5	3	1	1	4	4	
わからない	2		2			2	1	1			2		15
あまり生かされない	1						1	1	2			1	10
ぜんぜん生かされない												1※	

※自分で案が浮ばない

表(10) 表現することに対しての感想（複数回答）

グループ	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	割合%
とても楽しい	2	1	2	2		1	1			1		1	33
案外楽しい		3		2	2	2		1	2				
むつかしい	4	3	2	2	3	4	3	6	3	1	5	3	57
恥ずかしい			1	2	1		2			3			16
こわい													
苦痛												1	

### Ⅲまとめ—ダンス授業の課題

#### (1) ダンス嫌い

今まで述べてきた問題点の点検の中で、いろいろな場面でのダンス嫌いがあらわれていた。ダンスのVRTをみて、やりたくない、いやになった、不安になった、などのマイナス反応を示し、いざ実際にとりかかってみると、活動中「とてもいやだった」と思い、積極的に取り組むどころではなく、発表会では、自分の発表では緊張しそうたり覚えていなくて、まちがえて恥をかいたりして、最終段階でも「とてもいやだった」生徒達である。

ところが「ダンス嫌い」と言う生徒でも、実は「ダンス」そのもの、「踊ること」すべてが嫌いなのかどうかはわからない。不器用で美しく動けない、リズムもはずれる、第1覚えられない。まして自分で動きのアイディアなどは思い浮ばない。人前にぎこちない動きを見せねばならないので恥ずかしい—といった自信のなさから嫌いな場合がある。しかし、これとは別の理由で、たとえば、嫌な人が同じグループにいる、仲間うちで喧嘩してしまった、やっているうちに言動不一致で友人を見損った等で嫌いな場合がある。これらは

人間関係のますさからくる気分をダンス嫌いと混同した場合である。恥ずかしい、めんどくさい、みっともない、バカらしい—いろいろな思い方はあっても、ダンスそのものをイヤだとする理由はほとんど見当らない。つまり、時期が変り、グループが変り、テーマを変えれば—ある程度の作品の完成、達成感が味わえれば、急にダンスを親しく思うこともあるだろう。あるいは、「創作ダンス」などという「考える」ダンスでなく、踊り楽しむダンスなら、踊るよろこびを感じることができたかもしれない。従って、この創作の授業に入る前に、踊る経験をできるだけ多くもたせ、「嫌い」の要素をできるだけとり除いておく必要があろう。または、創作ダンスの内容をあまり固く考えさせないとか、リズムや動きのモチーフをある程度与えて、踊りが滑らかになるまで十分練習させることなども必要であろう。どのスポーツにも言えるが、技術がかなりうまくならないと、本当の楽しさは味わえないのだから、まず、技術に対する意欲をクラス全体がもつように、ムード作りを積極的に行なう必要があろう。

表11) 創作ダンスの授業が終った感想(複数回答)

グループ	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	割合%
満足感、達成感あり	2	4	3	5	2	4	3	2	1				
むつかしいがやりがいあり	2	4		3	2	1		2	3			1	
楽しかった	1	4	1	3	2	3	2	1		1			116
作品に愛着を感じる	3	4		2		2	1	3					
苦労の割に得るところなし											1		
作品は思い出すのもいやだ											1		6
みじめになった						2							
とにかく終ってよかったです	1	2	2	1	2	4	2	3	3	4	5	4	48
その他(またやりたい、二度とやりたくない)	1											1	3

## (2) 創作活動の時間配分

今回は、およそ10時間があてて取り組んだが、もし生徒達が授業時間の10時間きっちりしかダンスに取り組もうとしなかったら、良い作品にしようという熱意がないものとして受けとめてしまうだろうし、作品自体も、幼稚なものにならざるをえず、活気のない授業になってしまうだろう。つまり、課外の自主練習時間は必要悪のようなもので、生徒達が創作熱意をもつなら、どうしてもふえてしまう時間であろう。しかし、作品の完成形を10とする時、その8割もの部分を課外に負うというのでは問題がある。従って、課外時間を多くもったから良い悪いではなく、授業時間をどう使い、課外時間をどう使ったが問題であろう。生徒達のアンケートに、授業時間が短すぎると思う者が多かった。しかし一方、ダンスの授業が多すぎると思っている者も多い。ダンスを嫌いだという者の中には、毎朝の練習や帰りの練習で束縛されるのが嫌だとする者も多かった。あるグループは、はじめの2~3時間は無益なお喋りで過し、中ほどの3~4時間のうち、実際に授業時間中を生かしたのは1~2時間、しかもグループの何人かは、相変わらずとり組もうとしなかった。そして発表会の間際になって、どうしても仕上げるために、早朝や帰りの時間が必要になった。発表当日は、出来上ったばかりで十分こなされていないので、程度の高い作品も多くあった中で、「覚えていない」「まちがえる」「途中でひとの動きを盗み見る」等の未完成さが目立っていた。

作品の長さからして、平均的な実質創作時間は3~4時間ぐらいであるが、それが授業中に行なわれず、課外のやっつけ仕事となってしまうところに問題がある。今年度は、毎時間の活動記録を提出するよう義務

づけたが、時間を有効に使うという点で、指導者が期待したほど効果があったとは思われない。しかし、多少は計画的に取組む姿勢につながったと思われる。今年度計画の中で反省すべき点は時間配分で、完成から発表に向けて、練習し、自分のものとするための時間を確保しなかったことである。リハーサル、評価、VTR撮影とすすめていく中で、作品は除々に洗練されてくるがその段階でのフィードバックが可能であるためには、もっとVTRの活用を考えねばならない。作品を一度客観的に見ることで、飛躍的によい作品に生まれかわることが多い。ダンスを作品完成で終りとせず、演じる事を最終目標とするなら、時間配分に改善の余地があろう。

## (3) 人間関係

ダンス創作の過程で、グループの雰囲気、人間関係の良し悪しは重大である。特に、マイナス面をもっている時には作品に決定的な影響をもつと言っても良いだろう。

作品完成グループと未完成グループのちがいがどのあたりにあるかアンケートから深ってみると、人間関係の良悪と満足感にひらきが大きいことがわかる。グループとして機能するには共通目標、相互の影響力、団結力等があるが、それらの要素の何かが欠ける時、事実上グループは崩壊する。人間関係に問題のあるグループができたことについては、指導者の計画自体に反省すべきことがあると思われる。グループ編成は、完全無策意でなく、生徒達の任意の仲間関係によるものであったか、かえってマイナス面があらわれてしまった。事前に友人関係調査を行なうなどをして、幾分教師指定の編成とした方がトラブルが少ないのでないかと思われる。その場合、新しい人間関係の成立や

新しい友人の発見はできなくなるものの、日常の友人たちの再発見があるだろうし、場合によっては、今年度同様、途中での仲間割れが起きることもある。しかし、いずれにせよ、もう一步踏みこんだ丁寧な配慮が必要であろう。

#### (4) 指導上の問題点

ダンスの授業では意欲のない生徒はかなり多いが、それでもその大部分の者は、渋々ながらも創作ととり組んでいく。ところが、中には徹底して入ろうとしない生徒がいる。グループが活動的で明るい場合は、彼女はあまり問題化しないし、最後の段階では「意外におもしろい」と反応することもある。問題は、グループがうまくゆかず、「つまらないーうまくゆかない」の悪循環を起している場合である。そのようなグループ内では、意欲欠如児は増え自分の殻にとじこもり、他人の眼を気にし、本番では恥かしがって笑い出したりまちがえるなどして、場面を台無しにしてしまう。

このような生徒も含めて、毎時、教師ができる事は何か。創作の活動段階によって指導者ができる内容はちがってこよう。事実、一つのアドバイスが適切だった場合、急にグループが生きかえるという事がある。Bグループは、テーマを決定する時に、他のグループより一週間遅れた。もう適当に決めておこうというムードになりかかっていたが、彼等が集めたテーマの中から、ダンスにしやすいもの、具体的なもの、具体的すぎるものなどを分類して最終決定した結果、グループのメンバー全員が乗り気になって、以後は楽しく取り組むことができた。また、空間形成についての助言で楽しさを見つけ出したグループや、内容についての最終的な助言で作品に幅ができ、リハーサルとは見ちがえるように完成させたグループなどがあった。このような経験から、教師は各グループに「何が」必要とされるのかを見つけ出すことが重要な役割であることを痛感した。どのグループも「何か」のきっかけをつかみさえすれば、驚くほどみすみずしく独創的になるのだから、教師の責任は重大である。しかし、現実

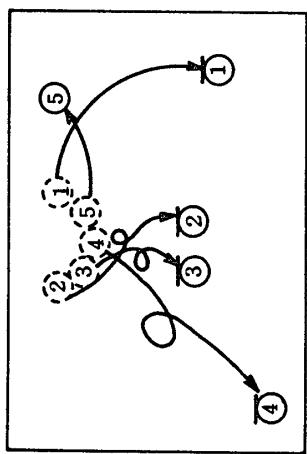
には、テーマの決定がされてしまうと創作段階に入り、教師はどちらかというと手もちぶたきになってしまう。適切な助言ができるように細かく観察しておく必要がある。VTRの活用も今後考えてゆきたい。客観的という意味では、映像にして写しながら批評を加えた方が生徒自身も納得しやすい。VTRの即時性がまだ授業では十分生かされていないが、指導法の上からもさし迫った課題である。

今回試みた、図解による作品の動きの記録と、VTRによる動きの記録は、再生するための音譜としての価値をもつ事ができなかった。その大きな理由は、作品そのものの形式化が不十分だった事である。動きが明確に形式化(パターン化)されていれば、次年度以下の学年の生徒によって再現することも可能であるはずである。そして、彼等は先年度作品を追体験することで、より深いダンス理解に達することができるだろうし、新しく創作をするための貴重な資料となることができよう。従って、これも今後の課題としてゆきたい。

ダンスは言うまでもなく「遊戯(Play)」の概念に含まれるものである。従って「まじめ」と「遊び」が対立するという伝統的な考えに立てば、過度の「まじめ」な取り組みは、かえってダンスの本質を見失なわせることになろう。しかし、Playとしての芸術の過程では、まじめで真剣な苦しみがあって後、完成された作品のうちに「遊ぶ」ことができるものであるから、同様に、発表会をともに楽しむことができれば、そこでダンスの本質に出会うことができよう。この意味でも、今回の指導は問題を残しているわけである。

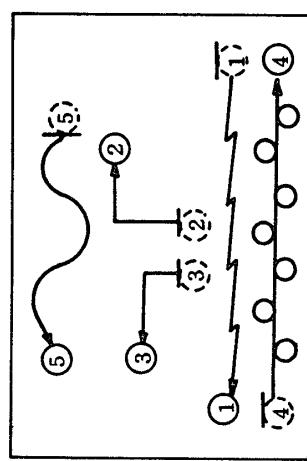
創作の授業は、一度方法を確立すればどこにでも通用するというものではなく、その時の生徒によって左右されるところが大きい。集団の指向、意欲、人間関係、個人の能力、性格、周辺の環境等で、どの要素が創作のポイントになるか決めにくい。今後とも検討を加えながら、方法の改善を積み重ねてゆきたい。

図解例(ア)



片手を下げ、もう一方の手を上げ、旋回して所定の場所まで曲のはじまるまでに移動し、次のポーズをつくる。

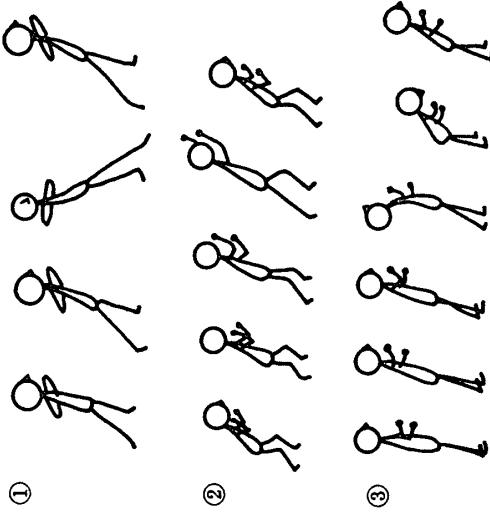
- 各自の動きで所定の場所まで移動（16呼間）  
(高低)  
①普通の姿勢から少し中腰になり、再びもどる(高)  
②少し小さくなつて、普通にもどし伸びる(低)  
③普通  
④普通  
⑤体を前傾させ中腰くらいで(中)



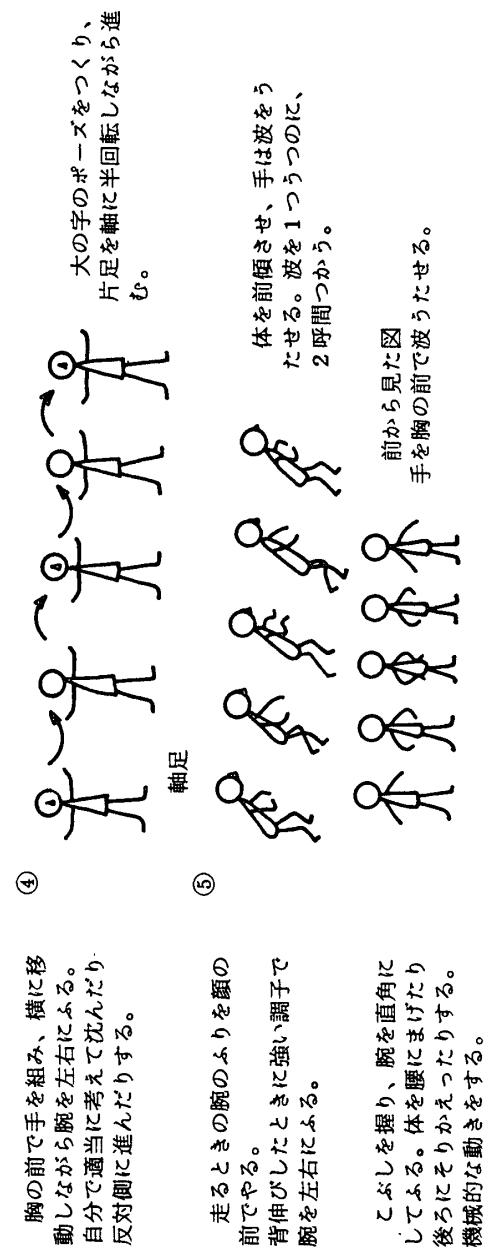
- 片手を下げる、もう一方の手を上げ、旋回して所定の場所まで曲のはじまるまでに移動し、次のポーズをつくる。

- 各自の動きで所定の場所まで移動（16呼間）  
(高低)  
①普通の姿勢から少し中腰になり、再びもどる(高)  
②少し小さくなつて、普通にもどし伸びる(低)  
③普通  
④普通  
⑤体を前傾させ中腰くらいで(中)

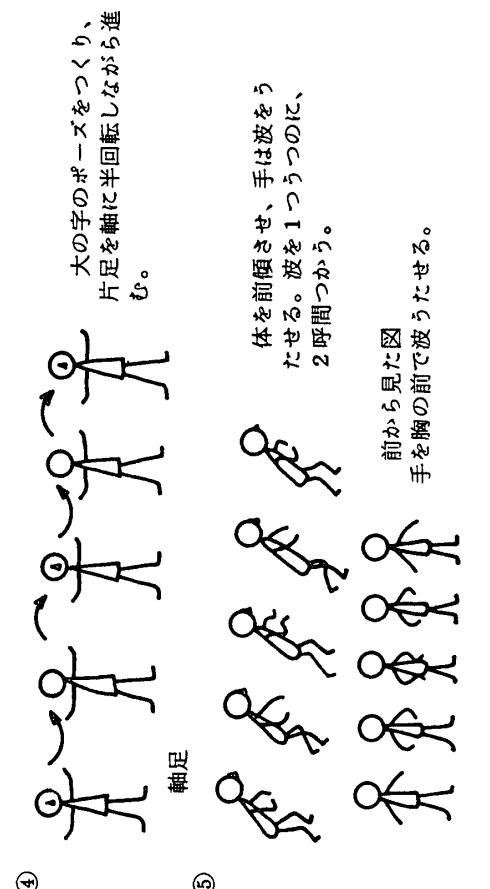
片手を下げ、もう一方の手を上げ、旋回して所定の場所まで曲のはじまるまでに移動し、次のポーズをつくる。



- 胸の前で手を組み、横に移動しながら腕を左右にふる。  
自分で適当に考えて沈んだり、反対側に進んだりする。



- 走るときの腕のふりを顔の前でやる。  
背伸びしたときに強い調子で腕を左右にふる。



- こぶしを握り、腕を直角にしてふる。体を腰にまげたり後ろにそりかえたりする。  
機械的な動きをする。



前から見た図  
手を胸の前で波うたせる。

## 創作ダンスの指導 (2)

図解例(イ)



図解例(ウ)

